

日韓言語文化研修 2005 を終えて

澤木幹栄¹

今回の言語文化研修は国際交流という面から見たら大成功だったと言えるだろう。穂高町の人々はとても親切にしてくださったし、一晚同じ屋根の下で暮らすことで外国の学生と話しこんだり、いろいろな形でふれあいもできたことだろう。その結果として「同じ人間なんだ」という認識も持てただろうと想像する。

信大の学生達はホスト役であったが、もちろんカトリック大の学生とも交流をし、困難な準備をやり遂げることで達成感を得たのではないかと思う。

カトリック大の人たちには東京のような都会だけでない日本を見ていただいた。実は日本人でも東京や大阪のような都会しか知らない人がいる。東京ではそれが当たり前だが、日本の大部分は田園であり、松本のような小都会や穂高のような田園のほうがありふれているのだ。その意味ではカトリック大学の人たちには通り一遍の観光では見ることのできない日本の知られざる重要な一面を知っていただいたことになる。

もちろん、そうした地域でごく普通に暮らしている人々と接したことはさらに意味のあることだったと思える。

そういうことを全部踏まえようで言うのだが、国際交流委員長として日々疑問に思っているのが「国際交流とは何か」なのである。大学を取り巻く状況は年々厳しくなっている。国際交流という抽象的な理念の達成だけでなく、具体的な成果を求められるのが昨今の風潮である。今回の試みが継続的にできるかどうかは目に見える成果を提示できるかどうかにかかっている。

そんな難しいことは抜きにして、学生の視野が広がったりすることは信州大学にとって今回の国際交流の最大の成果になるだろうと思われる。実際、わが人文学部の学生とカトリック大学の学生の間で人間同士のつきあいができたことはとてもよいことだった。カトリック大学の学生も人文学部の学生も相手があく普通の人間であることが分かったことだろう。私個人の感想を言わせていただければ、カトリック大学生が片付けや掃除などの作業を信大生と一緒に労を惜しまずし

¹ 信州大学人文学部教授（人間情報学科文化情報論講座）

ていたのを見て、なかなか見所のある若者たちだと思ったし、信大生も決して負けてはいないとも思った。

それだけでなく、私は李範錫先生の飾らないお人柄に接することができ、感銘を受けた。何よりも先生の日本での知人が私の交友関係と重なっていることがわかり、非常な驚きを受けた。先生の留学先を考えれば当然のことなのだが、先生にとって重要な知人は私にとっても浅からぬ因縁のある人たちばかりなのであった。全く、異国に知己を得た気持ちと言っても過言ではない。私にとっての最大の収穫がこれであった。

今回、日本語教育学分野の学生たちは入念にして綿密な準備を行ったと聞く。大変な労力をつぎこんだことになり、私としては学生たちを大いにねぎらいたい気持ちである。はたから見ると、ここまで厳密にしなくてもという細かさもあった。予定通りいかないのが当たり前だし、現実には予定表の時間通りにことが進行したということのほうが珍しかったのだから、もっと大らかにしたほうが苦労も少なかったのではないか。

「沖軍団」というニックネームは冗談としても、これだけの糸乱れぬ統制で準備し運営できるのは日本語教育学分野だけだろう。

日程のことでは、穂高で昼寝の時間が入ったことがあった。学生の疲労が際立っていたころだったので、とてもよかったと思う。もちろん、昼寝をしましよと言っても、幼稚園児ではないので、そんなに簡単に眠ることもできないのだが、何もしないで体と心を休める時間がとれたのはよいことだった。

今回はカトリック大学の学生にいいものを見せ、いい体験をしてもらおうということで、盛りだくさんの内容だった。一方で日程がきちりと決まっていたためにハプニング的な要素があまりなかったとも言える。実は私は将棋の駒と宗達の画集をかばんに入れていたのだが、どちらも使う機会がなかった。私なりにマンツーマンで「日本的なもの」についての説明をしたかったので、ちょっと残念だった。

この研修は人文学部主催という形をとっている以上、日本語教育学という一分野だけでなく、学部全体の学生にもメリットがあるものでなければならない。「笹本教授と歩く松本城」という企画はそのためのものだったが、なにぶんにも人数が多すぎた。どんなことをしたら、学部全体が国際交流の果実を味わうことができるかは宿題となっている。

さて、もう一度同じような機会があったらということで、提言させていただく。こちらの学生の日本語教育の技術向上に資することができ、カトリック大学の学生の日本語能力の向上にも役立つものとして、こんなことはどうだろうか。

まず、信大の学生とカトリック大の学生で3、4名の班を作る。この班のなかでこちらの学生が日本のことについて好きなテーマで話す。そのあとで、今度は

全員が集合し、その場でカトリック大の学生が日本側の学生が話したことを報告する。そのあとはその内容について全員で討論する。

これは全くの例なのだが、もうすこし日本語教育の比重を大きくし、見学的な要素を減らすということも可能ではないだろうか。あるいは、自由時間をもっと増やすということも考えていいたいだろう。

毎回食事のたびに「何か実のあることを」と沖教授に促されてスピーチをした。学生にとってためになっただけでしかもおもしろそうなことを考えるのはなかなか大変だった(おそらく、李先生も同窓会副会長の桜井さんもそうだったろう)が、これも沖教授の教育にかける熱意の現われだろう。今回の企画の大部分は沖教授によるもので企画実行の各段階でのご心労は大変なものだったと察する。

いろいろ苦言めいたことも書いてしまったが、今回事故もなく無事にこの研修を終えることができたのはなによりであった。この研修はカトリック大、信大のどちらの学生にも非常に大きな経験であったと思う。

同窓会副会長の桜井さんには穂高での日程のほとんどにお付き合いいただき、先輩の立場から有意義なことを学生に話していただいた。プログラム前半では松本市役所および松本市教育委員会にご協力いただいた。また、後半の舞台となった穂高町の役場には、毎日一人以上の職員をつけていただいただけでなく、役場のバスや「鐘の鳴る丘集会所」を使わせていただき、さらには多大なご援助もいただいた。まさに物心両面で最大限助けていただいたのである。もちろん、ホストファミリーの方々が門戸を開いてくださらなければ今回の企画は成立しなかったもので、穂高町役場とホストファミリーは今回、最大の貢献をしてくださったことになる。願わくばホストファミリーの方々にもよい思い出になっていることを。